

<巻頭言>



「管理の時代」における ダム技術とは

橋 本 徳 昭*

電力はもとより国，地方自治体の実施するダム建設は減少の一途を辿り，いまや文字通りの保全・運用，すなわち「管理」の時代全盛の観があります。個人の話で恐縮ですが，私が現場から戻って初めて本店建設部の副長になった，かれこれ20年ほど昔。当時関西電力は黒部川水系の電源開発の締めくくりとなる「新愛本地点」（現在音沢発電所と称している）がようやく完成する頃でしたが，こうした状況下で迎えたある年の新年挨拶の場での建設部長の「いよいよ保守の時代を迎えた」という言葉が今でも鮮やかに私の耳に残っています。この20年間，次第に新規開発から既設管理に軸足を移す，あるいは移さざるを得ない状況となり，ライフサイクルコスト，リスクマネジメントさらには最近アセットマネジメントなるカタカナが声高に語られるようになって来ています。

英語で管理というのは management と書きますが，元来は馬の調教を表す言葉だと聞き及んでいます。そう言えば，「じゃじゃ馬」という我が家の娘のような女性のことを英語では unmanageable woman（手に負えない女）というそうです。（この訳は研究社「ルミナス和英辞典」に掲載のもので，私の造語ではありません，念のため）また，動詞形の manage には「何とかやっていく」とか「間に合わせる，こなす」といった意味合いがベースにあるようで，まさに，Dam Management の本質を言い表すのに相応しい語感ではないかと思う次第です。

ダム技術者というのは，これまでどちらかというと計画，調査・設計，工事といった建設中心の技術畑が前面にでてきた感があります。建設に伴って種々の技術を習得した技術者が核となって保全・運用段階でも力量を発揮してきたのだと，建設方面を主に歩いてきた私には聊かバイアスのかかった思い込みがあります。

しかし本当にそのようなことで良いのかなという思いが最近とみに強くなって

* 関西電力(株) 支配人土木建築室長

います。建設畑で個々の技術者が鍛えられ、技術者としての基礎が築かれるのは事実です。しかし冒頭にも触れたように、少なくとも電力分野では、最早こうした技術者を育成し、陶冶してくれるフィールドは国内では希少と言わざるを得ないのが実情です。幸い海外の水力業務に携わる者は、現地の総合的な技術基盤や自然条件、労働条件などで日本の標準が適用できない場面に戸惑うことも多いとは思いますが、そのギャップを埋めるべく原点に立ち返った仕事を通じて、大きく技術者として成長しうる機会を得られるものと考えます。

翻って国内では今後は建設を未経験のまま既設の管理に専ら従事する技術者が増加するのは避けられないものと考えます。そうした技術者はどうして核となる技術力を習得し、保持・向上させることができるのでしょうか？

これまで得てして管理業務は建設中の課題やそのサイトのウイークポイントをフォローし、アフターケアするのがメインの業務になりがちであったと思います。建設から管理へ5W1Hで規定した管理マニュアルの如きものを引き継ぐ形で進められ、管理畑はいわばgivenの状態から業務をスタートさせるわけです。管理の世界だけでキャリアを積んだ技術者がこうしたgivenの仕事に埋没してしまったとしたらどうでしょう。仕事の中身の形骸化は避けられないものと容易に推察できます。こうした形骸化が進めば、設備は日を追う毎に老朽劣化の方向に進んでいくわけで、その間の変状を見ているのに感知できないようなことも起こってくるかもしれません。

現在ICOLDの技術委員会の多くは保全・運用段階での課題を取り上げており、建設を通じて成長した40代以降のダム技術者にはこれからのダム管理の課題の重要性が見通せているので問題はないのでしょうか、管理業務主体のこれからの技術者にとってこれらの課題が本当に大切なことと認識でき、さらにはこれらを解決することでダム技術者として一人前に育っていけるもの足りているのかというと、かなり疑問があると感じます。

保全・運用業務全般を通じて、ad-hocに必要とする技術だけでなく、これらの業務を通じて技術者を育成できるような技術体系に纏めなおすことも、「管理」の時代におけるダム技術者の喫緊の課題ではないでしょうか。この体系の下、管理の技術者が建設からのgivenで終始することなく、あくまでも自立的に5W1Hの管理マニュアルを見直し、水資源の有効利用と洪水防御・河川環境保全を達成する半永久的な施設としての既設ダムに新たな命を吹き込む日が一日も早く到来してほしいものと願っています。